

# 法勝寺跡発掘調査概報

昭和61年度

京都市文化観光局  
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

## 序

千年の歴史にはぐくまれた学問、芸術、文化、宗教の都であることをふまえながら、21世紀へ向けての理想のまちづくりを目指している京都は、伝統を生かし創造をつづける都市づくりに取組み、なかでも、2年後(昭和64年)の市政100周年事業並びに7年後(昭和69年)の平安建都1200年事業などを計画しております。

一方、都市の活性化に伴う開発に際して、埋蔵文化財を保存し、良好な環境を維持することが重要な課題となっております。

このような状況の中で、本市といたしましては、埋蔵文化財の保存について、市民の理解と協力を得る努力をいたしておりますが、保存が困難な遺跡につきましては、調査を行いその成果をできる限り後世に伝えるように努めております。

この調査報告書は、昭和61年度国庫補助事業として実施した調査の概要をまとめたものであり、本書が埋蔵文化財の研究に、また有用な資料として御活用いただければ幸いです。

本調査の実施にあたり調査を受託された財団法人京都市埋蔵文化財研究所、また御指導いただいた文化庁をはじめ御協力をいただいた関係各位並びに市民のみなさまに心から感謝の意を表します。

昭和62年3月

京都市文化観光局

## 例　　言

- 1 本書は、昭和61年度の文化庁国庫補助事業における、法勝寺跡発掘調査の概要報告である。
- 2 発掘調査は、京都市文化観光局が、財団法人 京都市埋蔵文化財研究所に委託し、同研究所がこれを実施した。
- 3 図中に使用したX・Yの数値及び方位は、平面直角座標系Ⅱによる。標高は、T.P.を使用した。
- 4 本書中の地図は、京都市の承認を得て、京都市計画局発行の都市計画基本図（2500分の1）・岡崎を修正して使用した。
- 5 写真は、遺構・遺物とも牛嶋 茂が撮影した。
- 6 本書の執筆は、主に瓦上村和直が、他を辻 裕司が行い、両者が編集を担当した。

## 本　文　目　次

1 調査経過.....	1
2 遺構.....	2
3 遺物.....	7
4 まとめ.....	12

## 図　版　目　次

図版一 遺跡 1 アドバルーン空撮 (東から)	
2 調査区全景 (北から)	
図版二 遺跡 アドバルーン空撮全景 (上から)	
図版三 遺跡 1 北縁雨落溝 (西から)	
2 西縁雨落溝 (北から)	
3 碓石据付穴二・1 (南東から)	
4 碓石据付穴三・1 (西から)	

- 図版四 遺物 出土土師器  
 図版五 遺物 出土軒丸瓦  
 図版六 遺物 出土軒丸瓦  
 図版七 遺物 出土軒丸瓦  
 図版八 遺物 出土軒平瓦  
 図版九 遺物 出土軒平瓦  
 図版十 遺物 出土軒平瓦  
 図版十一 遺跡 遺構実測図  
 図版十二 遺物 出土軒丸瓦拓影・実測図  
 図版十三 遺物 出土軒丸瓦拓影・実測図  
 図版十四 遺物 出土軒丸瓦拓影・実測図  
 図版十五 遺物 出土軒丸瓦拓影・実測図  
 図版十六 遺物 出土軒平瓦拓影・実測図  
 図版十七 遺物 出土軒平瓦拓影・実測図  
 図版十八 遺物 出土軒平瓦拓影・実測図

## 挿 図 目 次

図 1 調査位置図.....	1
図 2 雨落溝断面図.....	3
図 3 金堂・東西廊模式図.....	4
図 4 碓石実測図.....	5
図 5 下層遺構平面図.....	6
図 6 出土土師器実測図.....	8
図 7 出土ヘラ記号・刻印拓影.....	10

## 表 目 次

表 1 出土軒瓦観察表.....	14
表 2 出土軒瓦計測表.....	21

## 法勝寺跡発掘調査概報

### 1 調査経過

調査地点は、京都市左京区岡崎法勝寺町30に所在する。当該地に民家が新築されることに伴い、遺跡確認の目的から事前に試掘調査が実施された。試掘調査の結果から、造構検出面は浅く、上面は削平を受けているものの、礎石据付穴、溝、瓦溜等の造構が検出され、遺存状況は比較的良好であり、金堂及び左右にとりつく回廊の復原に極めて重要な地点であることが明らかになった。よって発掘調査に切り替え、調査を実施することになった。発掘調査は、試掘調査の成果を踏まえ、検出された東西溝以南が回廊部分に該当することが考えられることから、この地区を中心に調査区を設定し、調査終了後東西溝の北で検出された瓦溜の調査を行うこととした。発掘調査は1986年4月1日から同年5月15日まで実施した。調査面積は全体で約247m<sup>2</sup>ある。



図1 調査位置図

調査地点は、六勝寺中の筆頭伽藍である法勝寺境内のほぼ中央東寄りに位置する。<sup>1)</sup> 調査地点周辺ではこれまでに数箇所で発掘調査が行われている。西方では1974・75年度の2次にわたり発掘調査が実施され、荘大な金堂跡が検出された。<sup>2)</sup> 金堂跡は、現二条通の歩道から約2mの高まりに現存する。その高まりから東へ數十センチメートルずつ、2段の段差で低位となり調査地点に至る。調査地点は同步道から約80cm高まる。また金堂の東方から南面する地域に広大な池が拡がっていたとされるが、1972・80年度の発掘調査では池の肩口が検出されている。<sup>3)</sup> 寺域については、復原図などによって示されているものの、次に記すもの以外に発掘調査等によって確認されたものはない。法勝寺西限については岡崎動物園内西北部の発掘調査で南北溝が検出されている。<sup>4)</sup>

調査の結果、雨落溝、礎石据付穴など法勝寺回廊を構成する造構のほか、瓦溜、礎石抜取穴、及び法勝寺建立前の下層造構などを検出した。また検出造構を総合すると、回廊は調査区内で直角に折れ曲がることから、回廊の位置が確定できることになり、法勝寺を復原研究するうえで極めて重要な造構であることが判明した。また出土した土器・瓦類についても比較的まとまっており、法勝寺及び法勝寺建立前の当該地における歴史的変遷を考察するうえで更に資料を提示できるものと言える。

なお上述した回廊については、土地所有者の全面的かつ積極的な協力が得られ、土盛り及び設計変更等によって、現状のまま全面保存されることになった。

## 2 造構

### 層序

調査区の基本層序は、現表土が厚さ約20cmあり、表土下は調査区中央以南に、にぶい黄褐色砂泥層が厚い箇所で約20cm堆積する。この層中には瓦を多く包含する。この層を除去した時点で全体ににぶい黄褐色砂泥層となる。この層は厚さ約20cmあり、瓦、土器の細片を包含する。各造構はこの上面で検出した。にぶい黄褐色砂泥層下は黒褐色砂泥層が厚さ20~50cm堆積する。極めて僅かであるが土器の細片が含まれる。黒褐色砂泥層下は、暗褐色泥砂層、にぶい黄褐色粗砂層などが堆積する。これらの層中に遺物は包含していない。

### 造構

検出した造構には、雨落溝、礎石据付穴、瓦溜、礎石抜取穴、下層造構などがある。

回廊基壇に伴う地業については、調査区内では検出していない。造構の遺存状況などを観察すると、大半の造構上面は削平を受けていると考えられる。ただし回廊内側柱筋から



図2 雨落溝断面図

南へ約1.7mの地点でにぶい黄褐色泥砂層に密着した状態で、長径20~25cmの扁平な河原石を2個検出した。河原石はその位置から推定して、回廊基壇外装の延石の可能性もある。雨落溝

雨落溝は南縁の溝を除き、北・東・西の各溝を検出した。

北縁雨落溝は、東西方向に約10mにわたり検出した。検出面での規模は、0.9~1.1m、深さ約10cmある。溝底面の西半には石敷がある。石敷幅は遺存状態の良好な箇所で約60cmある。長径10~30cm大の扁平な河原石を比較的密に敷く。概ね長軸を東西方向に合わせ、3列に並べるもの、やや不規則な箇所もある。石材は、頁岩、砂岩が多く、チャート、礫岩、石英岩などがある。肩口に沿って一部に赤(明褐色)・黄(明黄褐色)粘土が認められる。これは後述する礫石据付穴には例外なく認められる。根石を固定する作業工程時に使用される赤・黄粘土と同一のものであり、この場合も雨落溝構築時に使用されたものと言える。なお東半は石敷が抜き取られるが、一部に赤・黄粘土が遺存している。

西縁雨落溝は、長さ約2mを検出した。上面及び西・南端は、抜取りや擾乱によって削平を受ける。溝底面には石敷がある。石敷上面には厚さ1~2cm程にぶい黄褐色粗砂が堆積する。検出面から石敷上面までの深さは23cmある。石敷には20~30cm大の扁平な河原石を使用する。石敷の東西両辺の石は、その長軸をほぼ南北方向に合わせ並べ、その間に比較的密に石を埋め込む。石敷幅は約70cmある。また石敷北西端の石3個は、長軸を東西方向に合わせることから南縁雨落溝との交点の可能性がある。石敷東辺に接して河原石を1個検出した。平坦面を溝側に合わせ、石敷上面との高低差は12cmある。石敷の石材には砂岩が最も多く、頁岩、チャート、礫岩などがある。

東縁雨落溝は、南北方向に長さ約13mにわたり西肩口を検出した。東肩口は調査区東端

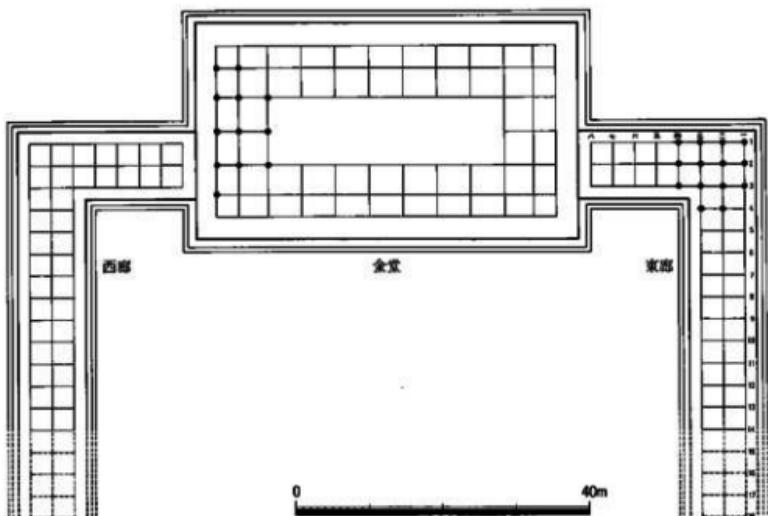


図3 金堂・東西廊模式図（黒丸は礎石据付穴の検出箇所を示す）

に長さ約1mのトレンチを設定し調査したが検出できなかった。検出面から溝底までの深さは6~20cmある。暗褐色泥砂が堆積する。石敷は中央付近で僅かに10~40cm大の扁平な河原石を検出したのみで、他は抜き取られる。中央以北では、一部で南北方向に連なる赤・黄粘土が溝底に沿って2条遺存しており、石敷の位置がほぼ推定できる。幅は約70cmある。

#### 礎石据付穴

礎石据付穴は、14基検出した。1基については礎石抜取時に完全に削平され存在しない。14基の礎石据付穴も礎石抜取穴によって削平を受け、遺存状態は悪い。只各礎石据付穴も根石の据付時に赤・黄粘土を使用しており、周囲の土層と明瞭に識別でき、ほぼその位置を限定、復原できる。礎石は、原位置を保つものはない。礎石は、礎石抜取穴に落し込んだものを3個検出した。1個はほぼ完存し、2個は割られている。礎石の抜取りは、抜取穴の埋土がほぼ同一であることから同時期の作業と言える。一基から染付陶器が出土した。なお礎石据付穴については、北東隅のものを起点として西(漢数字)及び南(算用数字)に向かって各々数字を付し、東西方向を優先として、直交する数字の組合せによって表記する。次に比較的遺存状態の良好な据付穴、及び特徴的な据付穴などについて概略を記す。

礎石据付穴二・1は、南半を抜取穴によって削平を受けるものの、根石の遺存状態は、

検出した据付穴の中で最も良好である。

平面形は、ほぼ円形を呈し、検出面での規模は、現存長で東西約1.6m、南北約1.2m、深さ34cmある。底面に粘土を貼り、その上面に長径10~25cm大の河原石を円形に配する。

礎石据付穴三・1は、西半を抜取穴により削平を受ける。根石は数個遺存する。平面形はほぼ円形を呈し、検出面での規模は、現存長で東西約1.1m、南北約1.2m、深さ35cmある。抜取穴

には根石と礎石が落とし込まれる。根

図4 磂石据付穴三・1に伴う礎石実測図  
石は10~35cm大のものが32個ある。礎石は花崗岩の自然石を使用し、上面はほぼ全面に加工痕が認められる。規模及び平面形は、1.1×1mのほぼ方形を呈し、厚さ約50cmある。上面は3方向を削り、造出しを設ける。造出しの隅角度は、上辺で一方が約90度、一方が約110度ある。

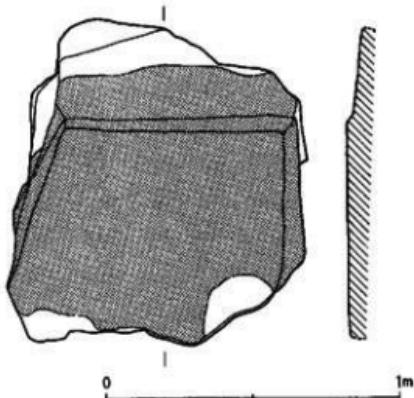
礎石据付穴一・2は、東半を抜取穴によって削平を受ける。根石は僅かに遺存する。平面形はほぼ円形を呈し、検出面での規模は現存長東西約1.1m、南北約1.9m、深さ27cm。

礎石据付穴三・2は、南東部の大部分を抜取穴によって削平を受ける。検出面での規模は、現存長で東西約0.8m、南北約1m、深さ23cmある。抜取穴には半截された礎石が落とし込まれる。礎石は花崗岩の自然石を使用している。表面は風化が激しく観察は困難である。規模は、北側の破片で長軸1m、短軸約0.7m、厚さ約30cmある。

礎石据付穴四・2は、西半が調査区外にある。平面形はほぼ円形を呈し、検出面での規模は、東西約0.8m、南北約1.3m、深さ約25cmある。

礎石据付穴二・4は、西南の大部分を抜取穴によって削平を受ける。検出面での規模は、現存長東西約0.8m、南北約0.9m、深さ13cmある。抜取穴には根石と破碎された礎石がある。根石は10~30cm大の河原石で約20個ある。礎石は花崗岩で、おおよそ8個に割られる。

なお据付穴及び抜取穴の根石については、各々4~40個ある。根石の材質は、判明した155個について述べると、チャート66個と頁岩43個が多く、その他砂岩22個、礫岩9個、花崗岩8個、石英岩3個、アブライト3個、凝灰岩1個などがある。



### 瓦溜

回廊の北側で3基検出した。互いに接した位置にある。

瓦溜1は、東辺が削平を受け、西辺は調査区外にある。平面形は三角形状を呈し、検出面での規模は、現存長で、長軸3.82m、短軸2.74m、深さ約70cmある。埋土は暗褐色泥砂、褐色泥砂、オリーブ褐色粗砂などからなり、各層から大量の瓦が出土した。

瓦溜2は、瓦溜1の東辺に接した位置で検出した。西北部は削平を受ける。検出面での規模は、現存長で、長軸2.2m、短軸1.25m、深さ約50cmある。埋土は暗褐色泥砂、にぶい黄褐色泥砂、黒褐色泥砂などからなり、各層から大量に瓦が出土した。また底面にはば接した状態で黒褐色泥砂から土師器皿がまとまって出土した。

瓦溜3は、瓦溜1の南西辺に接した位置で検出した。西部は調査区外にある。検出面での規模は、東西約0.9m、南北約1.2m、深さ約50cmある。埋土は暗褐色泥砂などからなり、大量の瓦が出土した。

### 下層造構

検出した造構は全て保存される為、従って下面については調査を行っていない。ただし調査区の北縁雨落溝より北側は順次掘り下げ、下層造構の検出を行ったが、造構は検出

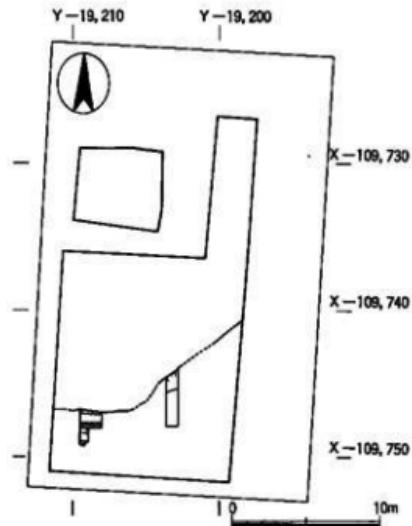


図5 下層造構平面図

していない。また回廊直下については、無造物層に達する各造構の断面を全て観察したが、下に記す溝状あるいは流路状を呈する造構のほかは検出していない。

下層造構についてその形状、堆積状況や遺物採集の目的で、2箇所に断割を行った。造構検出、断割及びその他の造構の壁面観察などから復原すると、北肩口は、調査区中央以東では北東から南西方向を示し、調査区中央でやや折れ西行する。

東方の断割では、北肩口を検出した。検出面から底部まで約1.1mあり、底部はほぼ平坦である。底部上面には、厚さ3~20cm程にぶい黄褐色粗砂が堆積し、古墳時代後期の土師器、須恵器が出土し

た。この上面には、によい黄褐色微砂・細砂の互層堆積がみられ水の流れを示す。この層まではほぼ水平堆積を示し、これより上層は、南がやや立ち上がり、断面では溝状を呈する。この溝状堆積のうち灰黄褐色泥砂層などから、平安時代後期の土師器を主体に瓦など大量の遺物が出土した。

西方の断面では2条の溝を検出した。北溝は、検出面での規模が、幅1.05m、深さ50cmある。最下層の褐色粗砂層は、粒子が均一である。中位のによい黄褐色砂泥層から平安時代後期の土師器を主体に大量の遺物が出土した。南溝は、検出面での規模が、幅1.23m、深さ50cmある。最下層のによい黄褐色粗砂層は、粒子が均一である。黒褐色粗砂層から土師器などが少量出土した。

### 3 遺物

遺物は、各造構から遺物整理箱で128箱出土した。遺物内容は、土師器、須恵器、黑色土器、縁釉陶器、灰釉陶器、無釉陶器、輸入陶磁器、瓦などがある。遺物のうち瓦の出土量が最も多い。土器類では、土師器が多数を占め、他は小片で量も極めて少ない。

#### 土器

回廊という造構の性格上、今回の調査では法勝寺創建以後のものは、瓦溜2出土のものを除き極めて少ない。従ってここでは、下層造構と瓦溜2から出土した土器について概略を述べる。なお瓦溜1・3からは土師器が出土したが量も少なく細片である。

#### 下層造構出土土器（図6 1~38）

土師器、須恵器、黑色土器、無釉陶器、輸入陶磁器などが、遺物整理箱で20箱出土した。土器には完形あるいは完形に近いものが多い。土師器のほかは1~数片出土した。なお下層のによい褐色粗砂から古墳時代後期に属する土師器、須恵器の小片が僅かに出土した。

土師器には皿があり、形態・法量により8種ある。I類1・2、II類、が多数を占める。

I類は、口縁部が斜め上方に立ち上がり、口縁端部は僅かに外反する。法量により4種に分けることができる。平均的な法量を示すと、I類1(18~25)は口径11.0cm、器高2.0cm、I類2(26~32)は口径14.0cm、器高2.5cm、I類3(33~35)は口径16.0cm、器高3.0cm、I類4(36~38)は口径18.0cm、器高3.9cmある。手法は、底部外面をオサエ、内面は不定方向のナデ、口縁部は2段ナデを行う。このうちI類4については、内面の底部から口縁部にかけて更に斜め上方のナデによって仕上げる。

II類は、口縁部が強く屈曲し、口縁端部は丸くおさめるものと、上方に立ち上がるもの

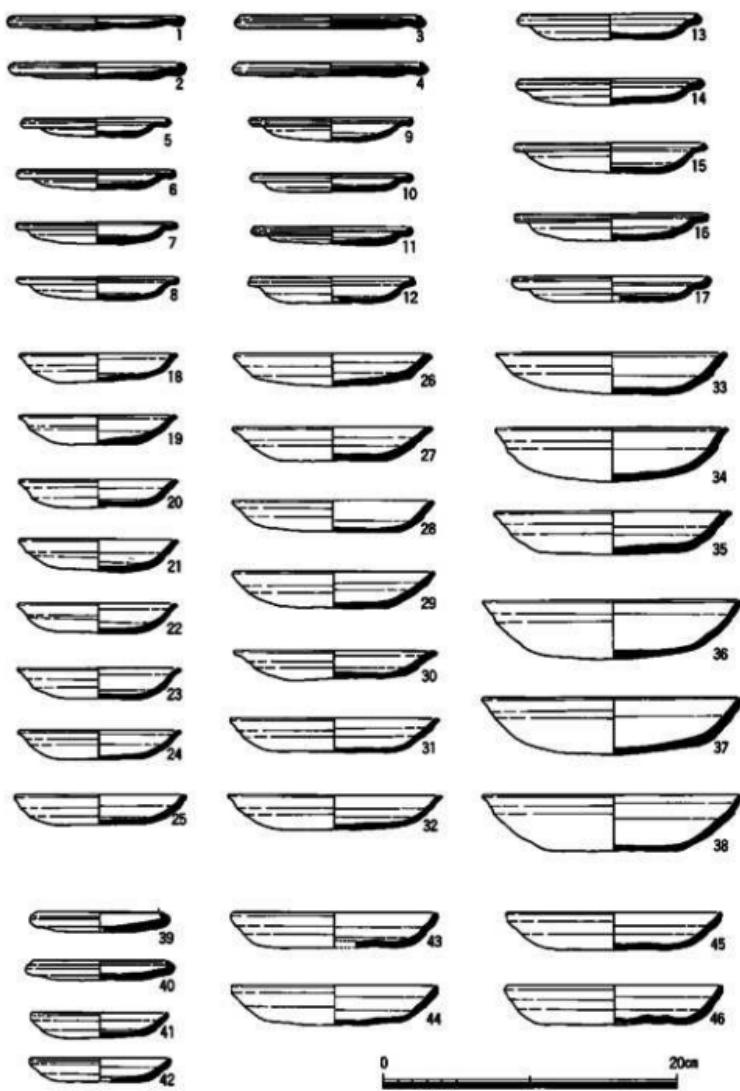


图 6 出土土器実測図

がある。法量により2種に分けられる。平均的な法量を示すとⅡ類1(5~12)は口径11.0cm、器高1.3cm、Ⅱ類2(13~17)は口径13.1cm、器高1.8cmである。手法は、底部外面をオサエ、内面はⅡ類1が直線方向のナデ、Ⅱ類2は不定方向あるいは直線方向のナデを行う。口縁部には強いナデを行う。

Ⅲ類は、扁平な形態を呈し、口縁部は強く内方へ折り曲げる。法量により2種に分けられる。平均的な法量を示すと、Ⅲ類1(1・2)は口径12.0cm、器高1.0cm、Ⅲ類2(3・4)は口径13.3cm、器高0.9cmである。手法は、底部外面をオサエ、口縁部直下の底部外面をやや強いナデ、内面は不定方向のナデを行う。

#### 瓦溜2出土土器(図6 39~46)

埴底面にはぼ接した状態で、完形あるいは完形に近い土師器が比較的まとまって出土しており、出土量は遺物整理箱で1箱ある。

土師器皿は、下層造構のものに準じて形態的に分類すると、Ⅰ類とⅢ類の2種ある。

Ⅰ類は、口縁部に上・下のナデを行うが、上段のナデは幅が狭い。口縁端部はナデにより僅かに上方に立ち上がる。法量により2種ある。平均的な法量を示すと、Ⅰ類1が口径9.6cm、器高1.6cm、Ⅰ類2が口径14.5cm、器高2.6cmである。

Ⅲ類は、口縁部を斜め内方に折り曲げる。口縁部直下の底部外面は、オサエによって底部から僅かに高める。平均的な法量を示すと、口径9.9cm、器高1.3cmある。

#### 瓦

出土した瓦には、丸・平瓦、軒丸・軒平瓦のほか、ヘラ記号や刻印を施すものがある。主な造構における瓦の出土量は、遺物整理箱で、下層造構が2分の1箱、瓦溜1が30箱、瓦溜2が19箱、瓦溜3が16箱、北縁雨落溝が5箱、東縁雨落溝が4箱ある。瓦溜や下層造構から出土したものは概して遺存状態が良好であり、完形に近いものもある。他の造構から出土したものは小片が多い。軒瓦は、総数77点出土した。下層造構では、軒丸瓦5点、軒平瓦1点ある。瓦溜1では、軒丸瓦9点、軒平瓦5点、瓦溜2では、軒丸瓦8点、軒平瓦11点、瓦溜3では、軒丸瓦10点、軒平瓦1点ある。また東縁雨落溝では、軒丸瓦2点、軒平瓦1点ある。礎石据付穴一・4に伴う礎石抜取穴では、軒丸瓦3点、軒平瓦7点、礎石据付穴二・4に伴う礎石抜取穴では、軒平瓦2点ある。その他、にぶい黄褐色砂泥層や搅乱層などから、軒丸瓦5点、軒平瓦7点出土した。さて今回出土した軒瓦は、出土状況や文様構成・成形手法などの特徴から、平安時代中期末のものと、平安時代後期のものに分類した。次にそれぞれの特徴を記す。なお軒瓦についての詳細は表を参照されたい。

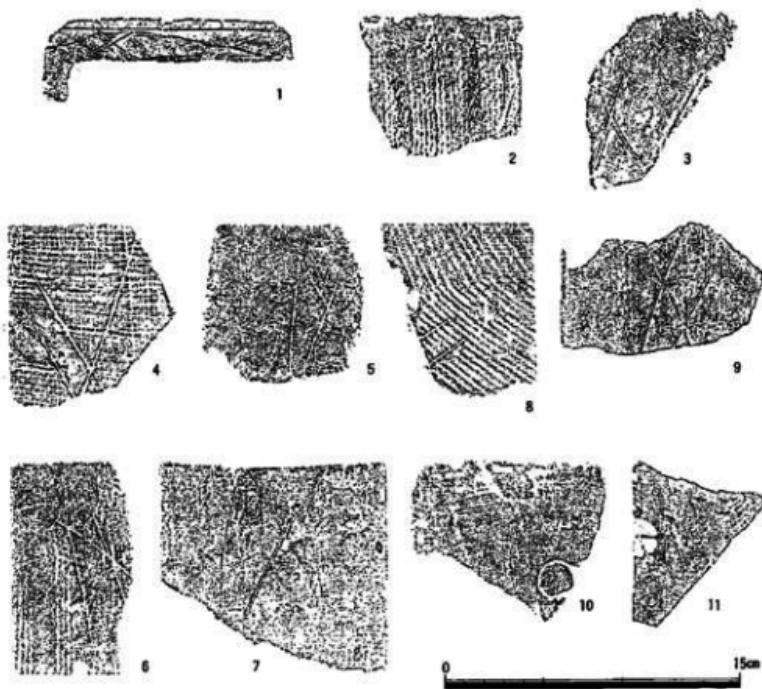


図7 出土ヘラ記号・刻印瓦拓影

#### 平安時代中期末の軒瓦（図版上・大）

軒丸瓦の瓦当成形手法には、一本造りのもの（1・2）、一本造りの退化・過渡的な手法を示すものの（3・4）、接合式のもの（4と同類の1点）がある。一本造りの退化・過渡的な手法のものには、所謂一本造りの手法で成形するが、丸瓦端部の折り曲げは瓦当中位までで、のち瓦当裏面に補足粘土を貼り付けるもの（3）と、瓦当部は別粘土を使用し、瓦当中位まで丸瓦端部を折り曲げて接合したのち、瓦当裏面に補足粘土を貼り付けて成形するもの（4）がある。接合式のものは、瓦当裏面上端よりやや下った箇所に丸瓦を接合する。接合粘土は多い。瓦当范はB型が多く、また瓦当部は比較的厚い。

軒平瓦は、平瓦部凸面に補足粘土を付けたものが多い。額の形態は、曲線額または段額を呈する。瓦当范はB型のものが多い。

5)

これらの軒瓦の中で、(2・7・39)と同類のものは今熊野池田窯跡から、(2・35~38)  
8)と同箇もしくは同類のものは太秦森ヶ東窯跡から、(7)と同類のものが大宮北山ノ前窯跡  
から、(2・31・39)と同範もしくは同類のものは西加茂河上窯跡から出土している。この  
他の軒瓦も、上に示した軒瓦と共に文様や瓦当成形手法等の特徴を示しており、ほと  
んど全てが平安京近郊で生産されたものと理解できる。

#### 平安時代後期の軒瓦（図版三~五・七・大）

軒丸瓦は、瓦当成形手法には接合式のものがある。瓦当裏面上端に丸瓦を接合し、接合  
粘土は少ない。瓦当部はB・C型があり、瓦当部は薄い。

軒平瓦は、瓦当成形手法には、平瓦凸面に補足粘土を貼り付け段顎を呈するもの(41)、  
瓦当裏面中位に指ナデで浅い溝を付けて平瓦を当て、凹凸面及び両側面に補足粘土を付け、  
バチ形の断面形を呈するもの(42~44)、平瓦広端部を凸面側に折り曲げ、段顎にするもの  
(39・46~55)がある。

これら軒瓦は、文様や瓦当成形手法などから、概ね河内、播磨、山城各地方でそれぞれ  
10)生産されたものと言える。なかでも山城産のものが量的には主流を占める。

#### ヘラ記号・刻印瓦（図7）

ヘラ記号・刻印を施すものは、総数12点出土した。ヘラ記号は、鋭利な工具を使用して、  
2~3本の直線方向の刻線を交叉ないし近接して構成するものと、円形に付するものがある。

瓦溜1では、5点ある。3本構成のヘラ記号を、丸瓦の玉縁に近い凸面に施すもの(4  
~6)と、軒平瓦(図版大 54)の平瓦部凹面中央に瓦当面に近接した箇所に施すもの(7)が  
ある。軒平瓦(図版大 53)では平瓦部凹面に僅かに刻線が1本遺存する。

瓦溜2では、同範の半截花文軒平瓦にヘラ記号を施すものが2点ある。1点(図版七  
46)は、平瓦部側面の瓦当面に近接した箇所に2本構成のもの(1)を、1点(8)は、平瓦部  
凹面中央に3本構成のものを施す。

瓦溜3では、平瓦の凹面に、円形のヘラ記号を施すもの(10)と、花形の刻印を施すもの  
(11)がある。

雨落溝では丸瓦凸面にヘラ記号を施すものがある。東縁雨落溝では、2本構成のもの(2)  
、北縁雨落溝では、3本構成のもの(9)がある。

によい黄褐色砂泥層から(3)が出土した。丸瓦凹面に2本構成のヘラ記号を施す。

## ま　と　め

文献史料によれば、法勝寺金堂の回廊は左右各20間、梁間2間の複廊とされ、しかも承暦元年(1077)の落慶供養時には、階上から樂を奏し散華できる程の大規模な構造を有した二階廊であったことが知られる。

調査では、原位置を保つ礎石は検出できなかったものの、検出した礎石据付穴や雨落溝などから最も矛盾の少ない相互の位置を求め、回廊の復原を試みた。方位については、検出遺構からは求められるものがなく、今回は、仮に座標北を用いた。また所謂軒廊と回廊は直交するものと仮定した。その結果、東廊は桁行、梁間とも1間が約3mの等間であること、外側柱筋と北縁雨落溝心々間及び東縁雨落溝心々間がそれぞれ2.7mであること、内側柱筋と西縁雨落溝心々間が約2.75mであることなどが判明した。これらは、文献史料から窺われる回廊の規模を彷彿とさせるに足る資料と言える。この資料と、金堂跡Ⅰ・Ⅱ次調査成果を総合し、金堂・東西廊の復原を図3の模式図として示した。<sup>12)</sup>

次に下層遺構と瓦溜2から出土した土師器について述べる。

下層遺構出土土師器は、その出土状況及び形態や法量から、比較的一括性の高いものと言える。この土師器は、高陽院SG1-A出土土師器、鳥丸線⑩—14土壙11出土土師器、<sup>13)</sup>平安宮内裏土壙76出土土師器などと形態的に近似する。これらの出土土師器のうち、今回<sup>15)</sup>の報告で比較的出土点数の多い土師器Ⅰ類と同類のものについて比較を行う。下層遺構のものを基準にすると、SG1-AのものはⅠ類2を除いて0.5~1cm口径が大きい。土壙11のⅠ類1の口径は11cmを満たさない。土壙16ではⅠ類1の口径は10cmある。器高も同様に土壙11・16のものは低くなる傾向を示す。以上のことから、下層遺構出土土師器は、SG1-Aのものより後出で、土壙11のものに先行する一群と言え、11世紀中頃を前後する年代を与えることができる。法勝寺建立前の当該地には、藤原氏累代の別業とされる白河院が営まれており、この時期には藤原賴通の所有になるとされる。

瓦溜2出土土師器と形態的に近似するものには、鳥丸線N0.51土壙26出土土師器、鳥丸<sup>16)</sup>線D区33WⅡ土壙1出土土師器などがある。形態・法量から、瓦溜2出土土師器は、土壙<sup>17)</sup>26のものに近似し、土壙1のものに先行する一群であると言える。法勝寺は、元暦2年(1185)に起った大地震によって、当回廊は言うまでもなく、主要堂宇は悉く倒壊する。以上のことから、瓦溜2出土土師器は12世紀末を前後する年代を与えることができる。

今回の調査では、各遺構から多種多様な瓦が出土した。ここでは軒瓦の検討を行う。

従来より法勝寺創建時の金堂所用瓦については、どの軒瓦を以って所用瓦とするか、出土瓦の生産・使用年代を含め先学による検討研究が行われてきた。今回の出土瓦の中で平安時代中期末とした軒瓦は、その使用年代の一点を明示するとともに、使用状況を傍証する資料と言える。これら軒瓦は、下層造構、及び下層遺構を掘り下げ削平した造構である礎石据付穴一・4や二・4の抜取穴、近在する擾乱等から出土したものが多い。これら軒瓦は、前述した出土状況や下層遺構から共伴した土師器の年代観からすると、法勝寺造営前のものに位置付けられ、前述した高陽院SG1-Aからは同範もしくは同類の軒瓦が出土している。なお個別的には、軒丸瓦1・2は瓦当成形手法から軒丸瓦の中でも先行するものと言える。また軒丸瓦3・4は、一本造りの退化・過渡的な瓦当成形寺法を示していることと、これらと同範ないし同類のものであっても接合式のものがあるなど、特徴的な在り方を示す資料である。さてこれらと同範もしくは同類の軒瓦は、これまでの六勝寺城での既往の調査報告によれば、法勝寺を除く調査地点では出土していない。また法勝寺境内でも金堂の周辺に分布する傾向にある。よってこれら軒瓦は、その年代観や出土状況から法勝寺造営前にこの地域に営まれていた白河院内の瓦葺きを以ってする某建物（文献史料では常行堂がある）所用瓦と推定することは許されよう。只なお創建時の金堂及び回廊所用瓦については、具体的に把握するには至らず、今後更に検討すべき問題が残されている。

次に平安時代後期の軒瓦については、大半が瓦溜から出土しており、瓦溜2出土土師器から、瓦の投棄年代が明らかにできた。個別的には、軒丸瓦9~12・14と、軒平瓦41~43・45と同範もしくは同類のものが他の遺跡から出土しており、比較検討が可能と言える。六勝寺城では、長治元年(1104)創建の尊勝寺、大治4年(1129)創建の円勝寺などや、康和4年(1102)創建の龍勝寺大智院などから出土している。また巴文軒丸瓦や劍頭文軒平瓦など<sup>19)</sup>は、文様や瓦当成形手法などに新しい要素がみられ、これらの中でも後出的な一群に位置付けられる。なお瓦溜は土器の年代観や瓦の出土状況から、元暦2年の地震に伴う廐瓦投棄用の土壤と考えられ、出土瓦は瓦溜の検出地点から推定すると、回廊あるいは金堂に葺かれた瓦と言える。またこれら軒瓦は、上記各遺跡出土のものとの比較やその年代から、法勝寺創建後の差替えなど補修用の瓦に位置付けられよう。

以上、調査成果について概略を述べてきた。遺構・遺物とも各々重要な情報を含んでおり、法勝寺の復原・研究には欠くことのできない貴重な資料と言えよう。

表1 出土軒瓦観察表

種類	番号	出土遺構	瓦当文様の特徴	瓦当部成形と丸平瓦の特徴	備考
軒	1	下唇遺構	単弁蓮華文。 弁は細長い。 内縁は粗い珠文帯。 案文の直立縁。	瓦当は折り曲げ成形で、補足粘土は表面上部に付ける。 瓦当側面調整は上半タテナデ、裏面調整はユビオサエ。	
	2	下唇遺構	単弁蓮華文。 中房は圓錐で、中央に蓮子1個を配す。 弁は幅広く宝珠形。 外区は圓錐が廻る。 筋キズ多い。	瓦当は折り曲げ成形。 瓦当側面調整は上半ナデ、裏面調整はユビオサエで布目若干残る。	註21)-134 13)-9 6)-23 8)-303と同類
	3	下唇遺構	単弁8弁蓮華文。 中房は凸錐で1+8の蓮子を配す。 内縁は珠文帯と左回り唐草文。 案文の直立縁。 中央に範割れ。	瓦当は折り曲げ成形、瓦当上面及び裏面補足粘土を付ける。補足粘土は少ない。 瓦当側面調整は上半タテナデ、後ハラケズリ、裏面調整はタテナデ後下部のみハラケズリ。	東縁雨落溝より同範1点出土。 下唇遺構より同範1点出土。 註21)-236 8)-97と同類 13)-11と同範
丸	4	下唇遺構	単弁8弁蓮華文。 中房は凹む。1+8の蓮子を配す。 内縁は珠文帯と左回り唐草文。 案文の直立縁。	瓦当は折り曲げ成形。瓦当面及び裏面に補足粘土を付ける。補足粘土は多い。 瓦当側面調整は上半ナデ、下半ヨコハラケズリ。裏面調整は上半ナデ、下半ハラケズリ。	一・4 磨石抜穴より同範1点出土。 この瓦当成形手法は接合式。
	5	磨石掻付穴 一・4に伴う 抜取穴	単弁8弁蓮華文。 中房は凸錐で1+8の蓮子を配す。 内縁は珠文帯と右回り唐草文。 筋より瓦当径が小さく、外縁が切れる。	瓦当成形不明。 瓦当側面調整は上半ナデ、下半ナデ、裏面調整はナダアグ。 丸瓦は凸面丸タクキ、凹面布目、側面ハラケズリで凹面側を面取り。	
瓦	6	にぶい黄褐色 泥砂	単弁8弁蓮華文。 中房は凹み小さい。1+8の蓮子を配す。 弁は短かく凸線で閉む。 内縁は粗い珠文帯と右回り唐草文。 筋より瓦当径が小さく外縁が切れる。 筋は磨滅し、文様は不明瞭。	瓦当成形は不明。補足粘土は多い。 瓦当側面調整は上半ナデ、裏面調整はタテナデで凹凸がある。	註13)-10と同範
	7	磨石掻付穴 一・4に伴う 抜取穴	単弁8弁蓮華文。 弁は短かく幅広い。 内縁は密な珠文帯と右回り唐草文。 唐草は強く巻きこむ。 筋より瓦当径が小さく外縁が切れる。 筋は磨滅し、文様は不明瞭。	瓦当成形不明。補足粘土は少ない。 瓦当側面調整は上半タテナデ、下半ナデ、裏面調整はナダ。	東縁雨落溝より同範1点出土。 註21)-235 8)-255 13)-14 6)-20
	8	下唇遺構	内縁は右回り唐草文。唐草は強く巻きこむ。 案文の直立縁。 筋キズがある。	瓦当成形不明。補足粘土は多い。 瓦当側面調整はヨコナデ。	にぶい黄褐色泥砂より、同範1点出土。 註13)-13と同範

軒	9	瓦 滴 3 複弁 8弁蓮華文。 中房は圓線で1+4の蓮子を配す。 弁・子葉とも凸線。 素文の直立線。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合する。補足粘土は少ない。 瓦当側面調整はヨコナデ、裏面調整はナデオサエ。 范はB型。 丸瓦は凸面純タタキ、凹面布目。	註22)-SWA05-a 8)-25と同范
	10	瓦 滴 2 複弁 8弁蓮華文。 中房は圓線で9よりも小さい、1+4の蓮子を配す。 弁・子葉とも凸線。 素文の直立線。 弁内に2本の范キズ。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合する。補足粘土は少ない。 瓦当側面調整はナデ、裏面調整はナデオサエ。	註19の1)-23B 22)-SWA05-b 8)-56と同范
	11	瓦 滴 1 複弁蓮華文。 中房は圓線。 弁・子葉とも凸線、弁は9・10よりも小さい。 素文の直立線。 范に木目出る。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合する。補足粘土は少ない。 瓦当側面調整は上半はタテナデ、裏面は強いナデ。 丸瓦は凸面ナデ、凹面布目、側面ヘラケグリ後ナデ。	
丸	12	瓦 滴 1 複弁 8弁蓮華文。 中房は大きい。 弁は高い。 素文の直立線。	瓦当成形不明。 瓦当側面調整は丁寧なナデ、裏面調整も丁寧なナデで平滑となる。	註19の3)-ER016 と同類
	13	にぶい黄褐色 砂泥。	瓦当成形不明。 瓦当側面調整は下半丁寧なナデ、裏面調整も丁寧なナデで平滑となる。 表面に難れ砂付着する。	註 8)-180と同范 20)-01-A 202)-1 21)-1と同類
	14	瓦 滴 2 単弁 8弁蓮華文。 弁は菱形で高く、上面は平坦。 中央に半球状の蓮子1個を配す。 素文の直立線で若干歪む。 瓦当面に糸切痕の残るものがある。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合する。補足粘土は少ない。 瓦当側面調整は上半タテナデ、下半ナデ。 范はB型。	瓦滴 2より同類 3 点出土。 註18の1)-86 19の3)-ER086 3の1)-3 8)-186と同類
瓦	15	瓦 滴 3 左回り三巴文。 巴は太く低い。尾は長く外縁に接する。 素文の直立線。 文様の上を指で押える。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合する。補足粘土は非常に少ない。 瓦当側面調整はオサエ、ヨコナデ、裏面調整はユビオサエで凸凹がある。 范はB型。	
	16	瓦 滴 3 左回り三巴文。 巴は太くやや高い。頭は15よりも小さい。尾は長く外縁に接する。 素文の直立線。 文様の上を指で押える。	瓦当裏面に溝をつけ丸瓦を接合する。補足粘土は少ない。 瓦当側面調整はナデオサエ。裏面調整もナデオサエ。	
	17	瓦 滴 3 左回り三巴文である。 文様は高い。尾は長く外縁に接する。	瓦当裏面に溝をつけ丸瓦を接合する。補足粘土は少ない。 瓦当側面調整はユビオサエ、裏面	

		素文の直立縁。 文様上をナデ。	調整はナデオサエ。	
軒	18	瓦 滅 2 左回り三巴文。 文様はやや高い。尾は長く外縁に接する。 素文の直立縁。 文様上に糸切痕残る。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合する。 瓦当側面調整はナデオサエ、裏面調整はナデ。	
	19	瓦 滅 3 左回り巴文。 文様は低い。尾は長く外縁に接する。 素文の直立縁。	瓦当成形不明。 瓦当側面調整はヨコナデ、裏面調整はナデ。	
	20	瓦 滅 1 左回り巴文。 文様断面は三角形。 素文の直立縁。	瓦当成形不明。 瓦当側面調整はヨコナデ、裏面調整はオサエナデ。	
	21	瓦 滅 1 左回り三巴文。 素文の直立縁。	瓦当裏面に溝をつけ丸瓦を接合する。 瓦当側面調整はナデオサエ、裏面もナデオサエ。	
平	22	瓦 滅 3 左回り巴文。 文様は低い。尾は長く外縁に接する。 素文の直立縁。 文様上を指で押える。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合する。 補足粘土は少ない。 瓦当側面調整はナデ、裏面調整もナデ。	
	23	瓦 滅 3 右回り三巴文。 文様は低く細い。尾は長い。 内縁は珠文帯。 素文の直立縁。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合する。 補足粘土は少ない。 瓦当側面調整はオサエナデ、裏面調整はナデ。	
	24	瓦 滅 2 右回り三巴文。 文様は低く細い。尾はやや長い。 内縁は珠文帯。 素文の直立縁。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合する。 補足粘土は少ない。 瓦当側面調整はオサエナデ、裏面調整もオサエナデで、平坦である。	
	25	瓦 滅 3 右回り三巴文。 文様は低く尾はやや長い。 内縁は大きい珠文帯。 素文の直立縁で若干歪む。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合する。 瓦当側面調整はオサエナデ、裏面調整はナデ。	
瓦	26	瓦 滅 1 右回り三巴文。 文様はやや低く、尾はやや長い。 内縁は大きい珠文帯。 素文の直立縁。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合する。 瓦当側面調整はオサエナデ、裏面はナデ。 范はB型。	
	27	瓦 滅 3 右回り三巴文。 文様は低い。 内縁は大きい珠文帯。 素文の直立縁。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合する。 補足粘土は少ない。 瓦当側面調整はオサエナデ、裏面調整はナデ。	
	28	瓦 滅 1 右回り三巴文。 文様は低い。頭部が接する。 内縁は珠文帯。	瓦当裏面に溝をつけ、丸瓦を接合する。 瓦当側面調整はナデ、裏面調整も	

軒 丸 瓦		素文の直立縁。 危険がある。 小型の瓦。	ナデで平坦である。	
	29	瓦 帯 1 太い圓線が巡る。 大きい珠文帯。	瓦当裏面の補足粘土は少ない。	
軒  平  瓦	30	礫石押付穴 一・4に伴う 抜取穴  唐草文。 唐草は強く巻き、連続する。 内縁は小さく粗い珠文帯。 素文の直立縁。 范よりも瓦当幅が広い。	瓦当成形は平瓦凸面に粘土を貼り付ける。段頸。 瓦当調整は下面ヨコヘラケズリ、側面タテヘラケズリ、裏面はナデオサエ。	一・4 級石抜取穴から同范1点出土。 二・4 級石抜取穴から同范1点出土。 註13)-39と同類。
	31	礫石押付穴 二・4に伴う 抜取穴  唐草文。 唐草は強く巻き、連続する。 内縁は大きい珠文帯。 素文の直立縁。 范よりも瓦当幅が広い。	瓦当成形は平瓦凸面に粘土を貼り付ける。曲線頸。 瓦当調整は上・下面ヨコヘラケズリ、裏面はタテヘラケズリ後ヨコナデ。 平瓦は凹面細かい布目、凸面タテヘラケズリ、側面ヘラケズリで凸・凹面無共、面取りする。	
	32	下層造構  均整唐草文。 唐草は様小化する。 内縁は密な珠文帯。 素文の直立縁。	瓦当成は不明。 瓦当調整は不明。	註21)-475 13)-37と同范
	33	にぶい黄褐色 砂泥  均整唐草文。 唐草は様小化する。 外縁は小さく密な珠文帯。 素文の直立縁。	瓦当成形は広端部が厚い平瓦を使用。段頸。 瓦当調整は上面ヨコヘラケズリ、下面ナデオサエ、側面タテヘラケズリ。裏面はナデオサエ。	
	34	礫石押付穴 一・4に伴う 抜取穴  均整唐草文。 唐草は様小化する。 内縁は珠文帯。 素文の直立縁。	瓦当成形は平瓦凸面に粘土を貼り付ける。段頸。 瓦当調整は上面・下面・側面ヨコヘラケズリ。裏面はオサエナデ。	註13)-38と同范
	35	撫 瓦  左向き、扁行唐草文。 唐草は強く巻く。 内縁は粗い珠文帯。 范より瓦当が薄く、下外区が切れる。	厚い平瓦を使用し、頸は押え瓦当部を成形する。 瓦当調整は上面延いオサエ、下面ナデ、側面ヨコナデ、裏面オサエ。平瓦は凹面細い布目、凸面オサエナデで凹凸がある。側面はタテヘラケズリ。	註21)-457・458 と同類
	36	にぶい黄褐色 砂泥  3回反転均整唐草文、中心で交わる。 唐草は強く巻きこむ。 文様は低い。 范より瓦当が薄く、外区なし。	軒瓦用の厚い平瓦を用い、瓦当部を成形。段頸。 瓦当調整は上面オサエ、下面ヨコヘラケズリ、側面タテヘラケズリ、裏面ユビオサエ。 平瓦は凹面太い布目、凸面ユビオサエ、ナデで凹凸がある。側面はタテヘラケズリ。	
	37	下層造構  3回反転均整唐草文、中心で交わる。	軒瓦用の厚い平瓦を使用し、瓦当部を成形する。	註13)-41と同范 2の1)-図13-1

	37	唐草は強く巻きこむ。 篆文の直立縁。 范より瓦当が薄く、下区が切れる。	瓦当調整は上面ヨコヘラケズリ、下面オサエナデ、側面タチナデ、裏面オサエナデ。 平瓦は凹面低い布目、凸面オサエナデで、凹凸がある。側面はタチナデ。	21)-447・448 と同類
軒	38	費石搭付穴 一・4に伴う 抜理穴	3回反転均整唐草文、中心で交わる。  唐草は強く巻きこむ。 文様は低い。 篆文の直立縁。 范より瓦当が薄く、外区が切れる。 文様上に離れ砂付着。	軒瓦用の厚い平瓦を用い、瓦当部を成形。曲線型。 瓦当調整は上・下面ヨコヘラケズリ、側面タチヘラケズリ、裏面はユビオサエで凹凸が激しい。 平瓦は凹面、細かい布目、凸面オサエナデで凹凸があり、部分的に平行の圧痕がある。側面はタチヘラケズリ。
	39	費石搭付穴 一・4に伴う 抜取穴	3回反転均整唐草文。 唐草は2重凸線で連続する。 内縁は大きく粗い珠文帯。 范より瓦当幅が狭く、外縁が切れ る。	瓦当成形は平瓦凸面に粘土を貼り付ける。段積。 瓦当調整は上・下・側面ヨコヘラケズリ、裏面はナデで接合部は強くオサエる。 平瓦は凹面、細かい布目、凸面タチナデ、側面タチヘラケズリ。
	40	瓦 漆 2	唐草文。 唐草の巻き弱い。 篆文の直立縁。	瓦当成形は平瓦凸面に粘土を貼り付ける。 瓦当調整は下・側面ヨコナデ、裏面オサエナデ。
瓦	41	瓦 漆 2	3回反転均整唐草文。 唐草は太く、1単位ずつ離れる。 篆文の直立縁。	瓦当成形は平瓦凸面に粘土を貼り付ける。段積。 瓦当調整は下・側面ヨコナデ、上面は不調整。裏面はオサエ、ヨコナデ。 平瓦は凹面、細かい布目、凸面タチヘラケズリ、側面タチヘラケズリ後タチナデ。
	42	にぶい黄褐色 砂泥	3回反転均整唐草文。 唐草は強く巻き、子葉が2つに分かれて山形をつくる。 篆文の直立縁。	瓦当裏面中央に溝をつけヨコナデし、平瓦を接合する。 瓦当調整は上・下・側面ヨコナデ。
	43	瓦 漆 2	唐草文。 唐草は巻きこむ。 篆文の直立縁。	瓦当裏面中央に溝をつけ平瓦を接合する。 瓦当調整は上面ヨコナデ、下面ヨコヘラケズリ、側面タチナデ、裏面ヨコナデ。
	44	瓦 漆 2	3回反転均整唐草文。 唐草は強く巻く。 篆文の直立縁。	瓦当裏面中央に溝をつけ、平瓦を接合する。バチ形。 瓦当調整は上・下・側面ヨコナデ。 平瓦は凹・凸面ヨコナデ、側面は

			タテナデで丸くなる。	
軒	45	瓦 滯 2 右向き 3 回反転鳩行彦草文。 素文の直立線。	瓦当成形不明。 瓦当調整は上面斜方向のヘラケズリ、下面ヨコナデ、裏面オサエ後ヨコナデで凹凸がある。 平瓦は凹面布目、凸面ナデで、糸切痕がある。側面ヘラケズリ。	
	46	瓦 滯 2 3 回反転均整唐草文。 唐草は太く、連續しない。 中心飾は 3 重半截花文。 素文の直立線。 文様上半に布目がつく。	瓦当は折り曲げ成形。 瓦当調整は下・側面ヨコヘラケズリ、裏面オサエ後ヨコナデで、布目の付くものがある。曲げじわがある。 平瓦は凹面細かい布目、凸面純タタキ後ナデ、側面はタテヘラケズリで、凹・凸面側共面取りする。	瓦滯 2 より同范 1 点出土。 註 19 の 3 ) - SR272 B 21) - 542 8) - 193 と同范
	47	瓦 滯 2 3 単位均整半截花文。 中心飾は下から中央までの凸線。 素文の直立線で上外区はない。 文様上面に布目がつく。	瓦当は折り曲げ成形。段積。 瓦当調整は上面斜めヘラケズリ、下面ヨコナデ、側面タテヘラケズリ後ナデ。裏面オサエナデ。曲げじわあり。 平瓦は凹面布目で糸切痕がある。 凸面純タタキ後ナデ、側面ヘラケズリで凹面側のみケズリで面取り。 側面にヘラ記号。	瓦滯 2 より同范 3 点出土。
平	48	瓦 滯 3 幾何学文。 文様は 10 個連続。 素文の直立線。 上外区に布目付く。	瓦当は折り曲げ成形。段積。 瓦当調整は下面ヨコヘラケズリ、側面タテヘラケズリ、裏面強いヨコナデで凹凸があり曲げじわがある。 平瓦は凹面、細かい布目で下に糸切痕、凸面ナデ、側面タテヘラケズリ。 鈴は日型。	
	49	瓦 滯 1 劍彫文。 文様は 8 個。 外縁は素文。	瓦当は折り曲げ成形。段積。 瓦当調整は上面斜方向のヘラケズリ、下面ヨコヘラケズリ、側面ナデ、裏面オサエ・ナデ。曲げじわあり。 平瓦は凹面、細かい布目で、下に糸切痕、凸面細い格子タタキ目で、上をナデる。側面タテヘラケズリ。	
瓦	50	東嶽南落款 劍彫文。 文様は低い。 外縁は素文。	瓦当成形は不明。段積。 瓦当調整は上面斜方向のヨコヘラケズリ、下面ヨコヘラケズリ、側面ナデ、裏面オサエで曲げじわ多い。 平瓦は凹面、細かい布目、凸面は	

軒	51	にぼい黄褐色 砂泥	側頭文。 文様は幅広い。 外縁は素文。	丁寧なタテナデ、側面タテナデ。 瓦当成形は折り曲げ成形。段額。 瓦当調整は上面斜方向のケズリ、 下面ヨコナデ、裏面ナデ。曲げじ わあり。 平瓦は凹面、粗い布目、凸面ナデ。
	52	瓦 薙 1	側頭文。 外縁は素文。	瓦当は折り曲げ成形。段額。 瓦当調整は下面ヨコヘラケズリ、 裏面オサエで曲げじわが多い。
平	53	瓦 薙 1	側頭文。 外縁は素文。	瓦当は折り曲げ成形。段額。 瓦当調整は上面は斜方向のヨコヘ ラケズリ、下面ヨコヘラケズリ、 裏面から平瓦下面に粗い布目。 平瓦は凹面太く粗い布目、凸面ナ デ。 凹面にヘラ記号。
	54	瓦 薙 1	側頭文。 外縁は素文。	瓦當は折り曲げ成形。段額。 瓦當調整は上面ヨコヘラケズリ。 裏面に布目。 平瓦は凹面粗い布目。 凹面にヘラ記号。
瓦	55	瓦 薙 1	側頭文。 外縁は素文。	瓦當は折り曲げ成形。段額。 瓦當調整は上面ヨコヘラケズリ。 裏面に曲げじわ。 平瓦は凹面粗い布目。
				49と同類

表2 出土軒瓦計測表

番号	直徑	内区					外区					個(同類含む)数
		中房径	蓮子数	弁区径	弁幅	弁数	外区広	内径幅	文様	外径幅	高	
軒	1			3.5	0.9		3.1	1.5	S	1.5	0.2	素
	2	3.5	1	4.9	4.9	5	1.1			0.5	0.2	素
	3	3.0	1+8	2.2	1.8	8	3.2	1.3	HK	1.0	0.4	素
	4	11.7	3.0	1+8	2.8	1.9	8	1.8	HK			素
	5	13.4	2.8	1+8	2.6	1.8	8	2.7	HK	0.6	0.2	素
	6	13.1	2.8	1+8	2.6	2.2	8	2.1	HK			素
	7	12.8				1.8	8	2.7	HK			素
丸	8							1.4	HK	1.4	0.4	素
	9	13.5	5.7	1+4	2.1	3.0	8	1.0		1.0	0.4	素
	10	13.7	5.3	1+4	2.9	3.4	8	1.4		1.4	0.4	素
	11				2.1	3		1.0		1.0	0.4	素
	12				2.5	4.2		1.5		0.5	0.8	素
	13				3.1	4.3		1.4		1.4	0.8	素
	14	14.1	3.0	1	3.1	2.8	8	1.1		1.1	0.5	素
瓦	15	16.2						1.4		1.4	0.6	素
	16	15.2						1.1		1.1	0.6	素
	17							1.4		1.4	0.6	素
	18	15.7						1.1		1.1	0.6	素
	19							1.3		1.3	0.2	素
	20							1.1		1.1	0.5	素
	21							1.1		1.3	0.6	素
不明	22							1.2		1.2	0.5	素
	23	15.4						2.7	S 26	1.3	0.8	素
	24	15.0						3.2	S	1.2	0.8	素
	25							2.5	S	1.2	0.6	素
	26							3.0	S	1.3	0.8	素
	27							3.4	S	1.3	0.8	素
	28							2.0	S	0.4	0.9	素
不明	29							2.9	S . 圈	1.0	0.5	素
	計											42

番号	上弦弧	弦深さ	下弦弧	厚さ	内区		上外区		下外区		脇区		文様深さ	個体数
					厚さ	文様	厚さ	文様	草さ	文様	厚さ	文様		
軒				6.0	1.8	KK	1.0	S	1.2	S			0.1	3
				5.7	2.6	K	1.2	S	1.1	S	1.1	S	0.1	1
				1.5	K		1.0	S		S	0.7	S	0.1	1
				7.0	1.5	K	0.9	S	0.9	S	0.7	S	0.2	1
				5.6	1.6	K	0.7	S	0.9	S	1.3	S	0.2	1
				6.0	3.5	K	1.2	S	0.6	S			0.1	1
				4.8	4.8	KK							0.1	1
				5.6	4.8	KK	0.4	素					0.1	1
平				4.3	4.3	KK	0.9	素					0.2	1
				5.4	2.8	KK	1.2	S	1.1	S			0.1	1
				5.7	3.4	K	1.0	素	0.7	素			0.1	1
				4.5	2.6	K	0.8	素	0.8	素	0.7	素	0.2	2
				5.8	3.5	K	0.8	素	0.6	素	1.7	素	0.3	1
				5.8	3.2	K	0.9	素	0.7	素	1.2	素	0.2	1
				6.1	2.4	K	0.4	素	0.8	素	1.0	素	0.1	1
				3.1	HK		1.2	素	0.6	素	0.9	素	0.2	1
瓦				2.4	5.4	3.1	KK				1.1	素	0.2	2
				21.3	2.0	21.5	4.4	半花			0.7	圈	0.7	圈
				21.5	1.5	21.9	5.0	幾10	0.4	素	0.5	素	0.5	素
				20.0	2.1	3.8	2.7	KN	0.4	素	0.4	素	0.3	1
						4.5	2.0	KN	0.9	素	0.8	素	0.2	1
						3.7	2.3	KN	0.2	素	0.6	素	0.3	1
						3.7	2.6	KN	0.2	素	0.3	素	0.3	1
							2.4	KN	0.2	素	0.6	素	0.4	1
不明					3.9	2.8	KN	0.3	素	0.6	素	0.2	1	
							0.5	素	0.5	素			0.3	1
計														35

S : 珠文 K : 唐草文 HK : 扁行唐草文 KK : 均整唐草文 KN : 刀頭文

註

- 1) 法勝寺を含む六勝寺については先学による多くの論文がある。
  - 1 西田直二郎「法勝寺遺址」『京都府史跡勝地調査会報告』第六冊
  - 2 清水 墓「六勝寺の伽藍とその性格」『建築史学』第5号 1985年
- 2) 1 「法勝寺跡」『京都市埋蔵文化財年次報告』1974—II 京都市文化観光局文化財保護課 1975年  
2 「法勝寺金堂跡第Ⅱ次発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告』1975 同上1976年
- 3) 1 「京都市動物園爬虫類館建設工事に伴う“法勝寺跡”発掘調査報告」六勝寺研究会 前掲註2) — 1 所収  
2 「法勝寺跡(1)」「昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要」(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年
- 4) 「法勝寺跡」「昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要」(発掘調査編)同上 1982年
- 5) 木村捷三郎「平安中期の瓦についての私見」「延喜天暦時代の研究」1969年
- 6) 青山均・木村捷三郎「瓦塙類・出土瓦の考察」「大谷中・高等学校内遺跡発掘調査報告書」1984年
- 7) 梶川敏夫「平安京の瓦」「古代の瓦を考える一年代・生産・流通一」1986年
- 8) 京都市埋蔵文化財研究所編「坂東善平収蔵品目録」1980年
- 9) 前掲註7)
- 10) 上原真人「古代末期における瓦生産体制の変革」「古代研究」13・14号 1978年
- 11) 前掲註2) — 2 では金堂基壇延石から「磁北より6°09'20"東へ振れ」る方位を示している。
- 12) 金堂も今回の復原では方位に座標北を用いた。金堂の位置は報告書を参照した。また金堂身舎桁行は等間とした。回廊の20間は、内側・中央・外側各桁行の何れを採用するかにより異なる(点線)。
- 13) 「左京二条二坊(2)高陽院跡」「平安京跡発掘調査概報」(財)京都市埋蔵文化財研究所 1982年
- 14) 「京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ」京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1979年
- 15) 「平安宮内裏」「平安京跡発掘調査概報」(財)京都市埋蔵文化財研究所 1986年
- 16) 「京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ」京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1980年
- 17) 同上
- 18) 1 杉山信三・岡田茂「草勝寺跡発掘調査報告—京都会館建設地の調査—」「平城宮・伝飛



1 アドバルーン空撮（東から）



2 調査区全景（北から）



アドバルーン空撮全景（上から）



1 北縁雨落溝（西から）



2 西縁雨落溝（北から）



3 礎石据付穴二・1（南東から）



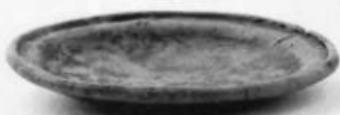
4 礎石据付穴三・1と礎石（西から）



2



3



9



16



23



25



32



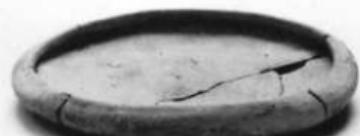
35



37



38



40



45



1



3



4



5



6



7

出土軒瓦



9



2



8



10



11



14



12



13

出土軒瓦



16



23



15



24



17



25

出土軒丸瓦



30



39



32



31



37



38

出土軒平瓦



46



45



41



42



43



44

出土軒平瓦



47



48



49



50



51



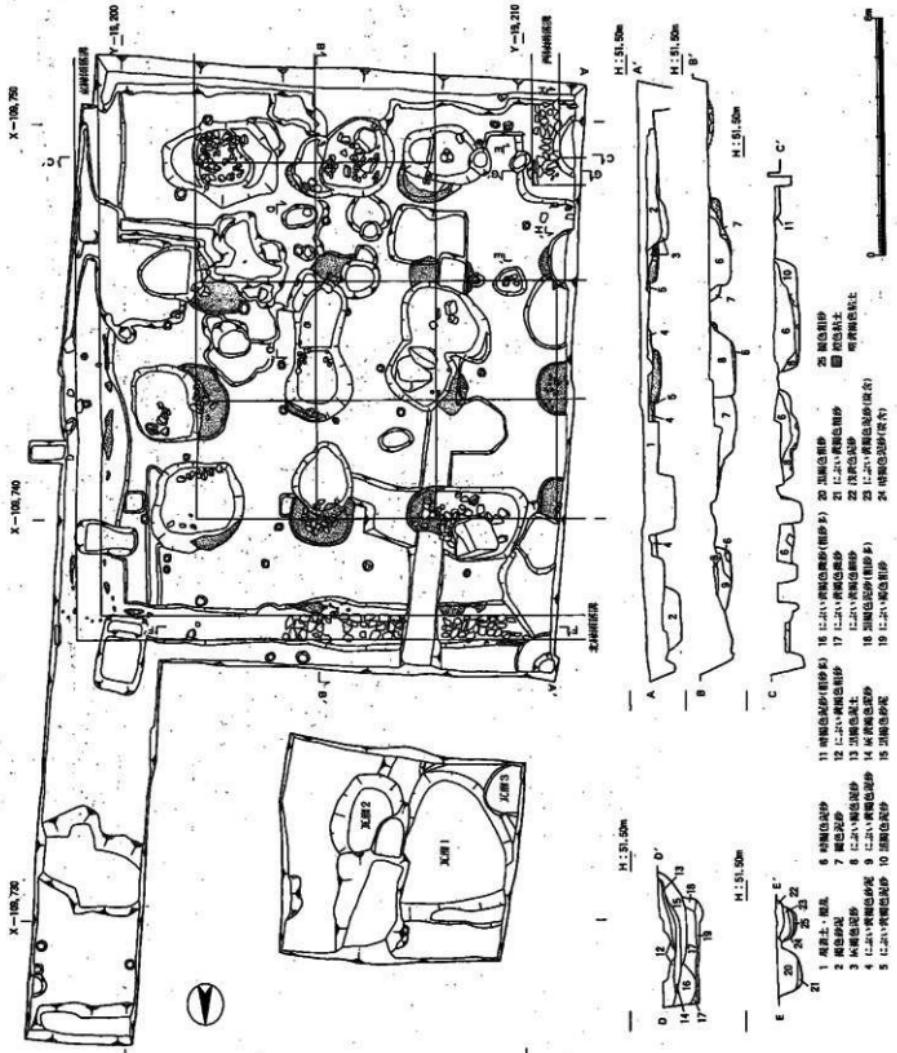
52



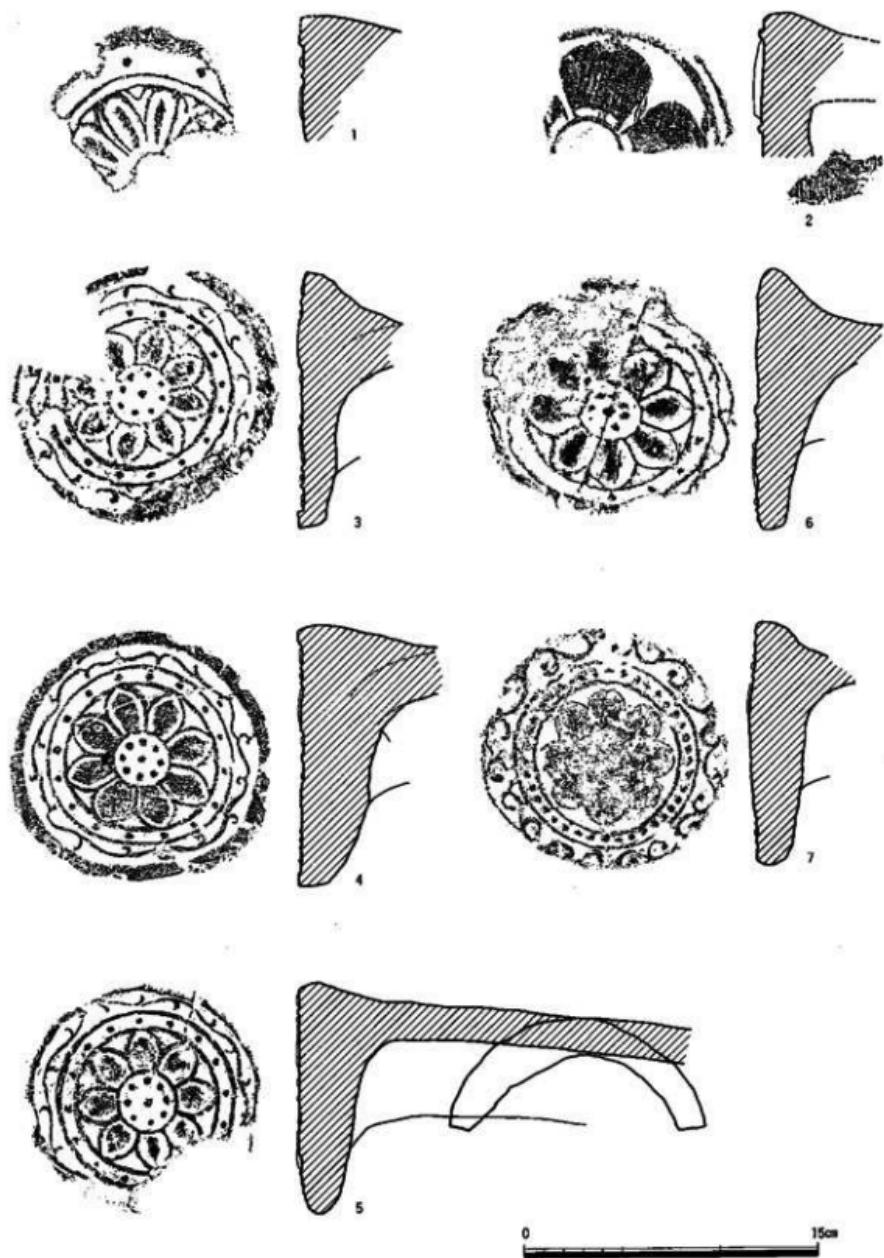
53

出土軒平瓦

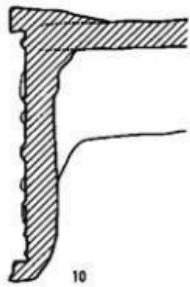
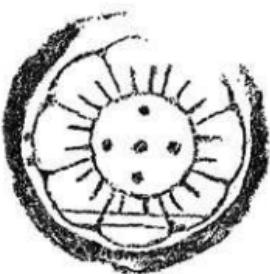
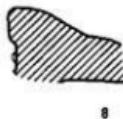
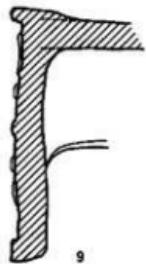
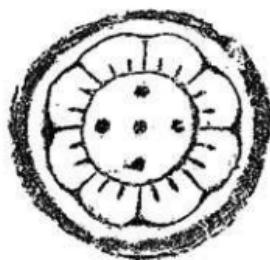
四百十一 異論



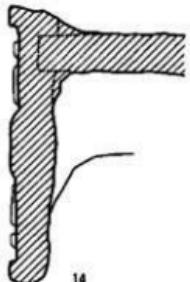
國朝



出土軒丸瓦拓影・実測図



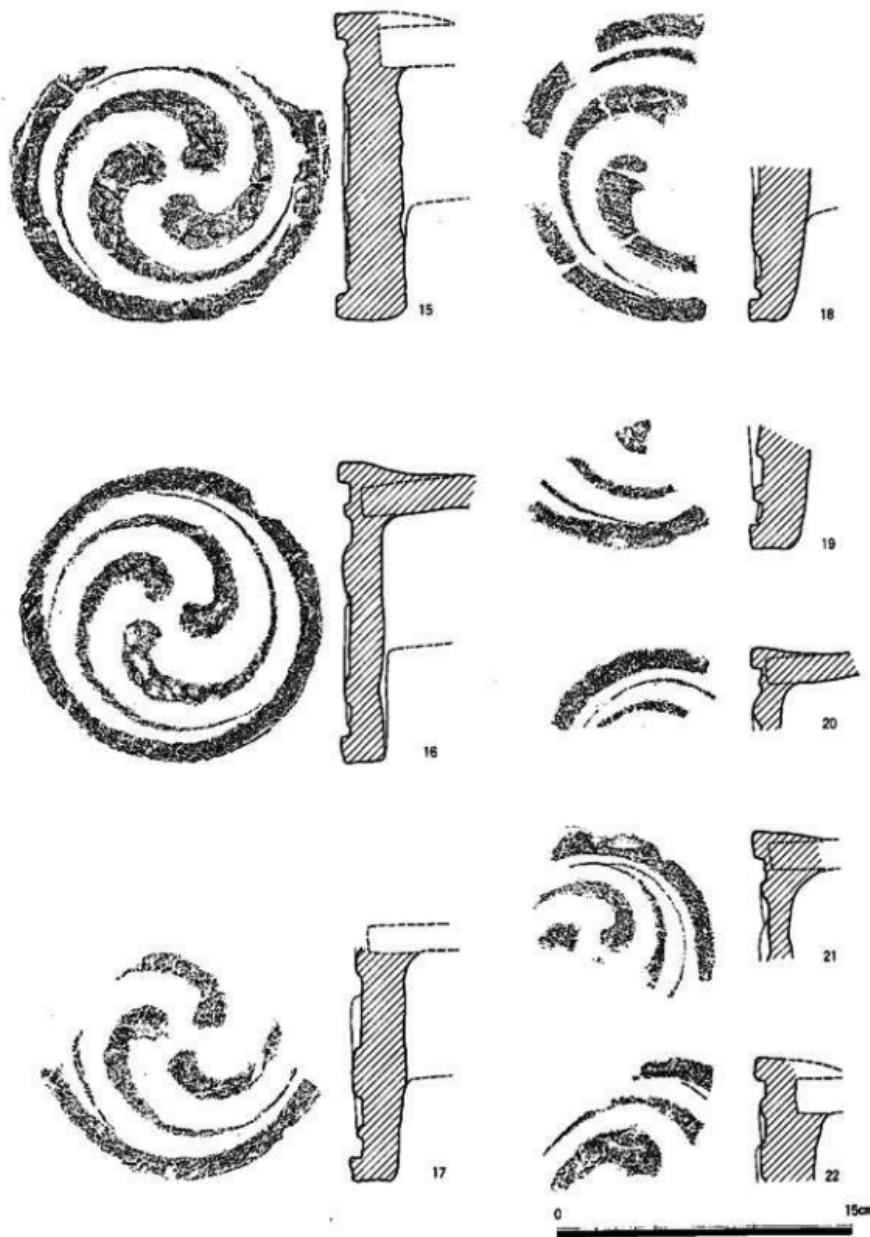
12



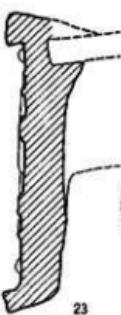
13



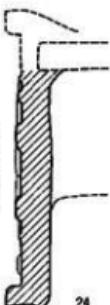
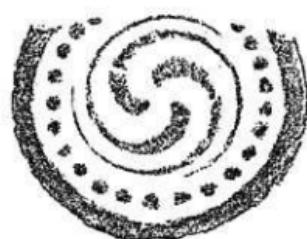
出土軒瓦拓影・実測図



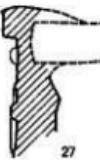
出土軒瓦拓影・実測図



26



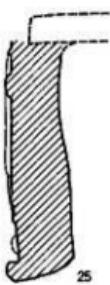
24



27



28



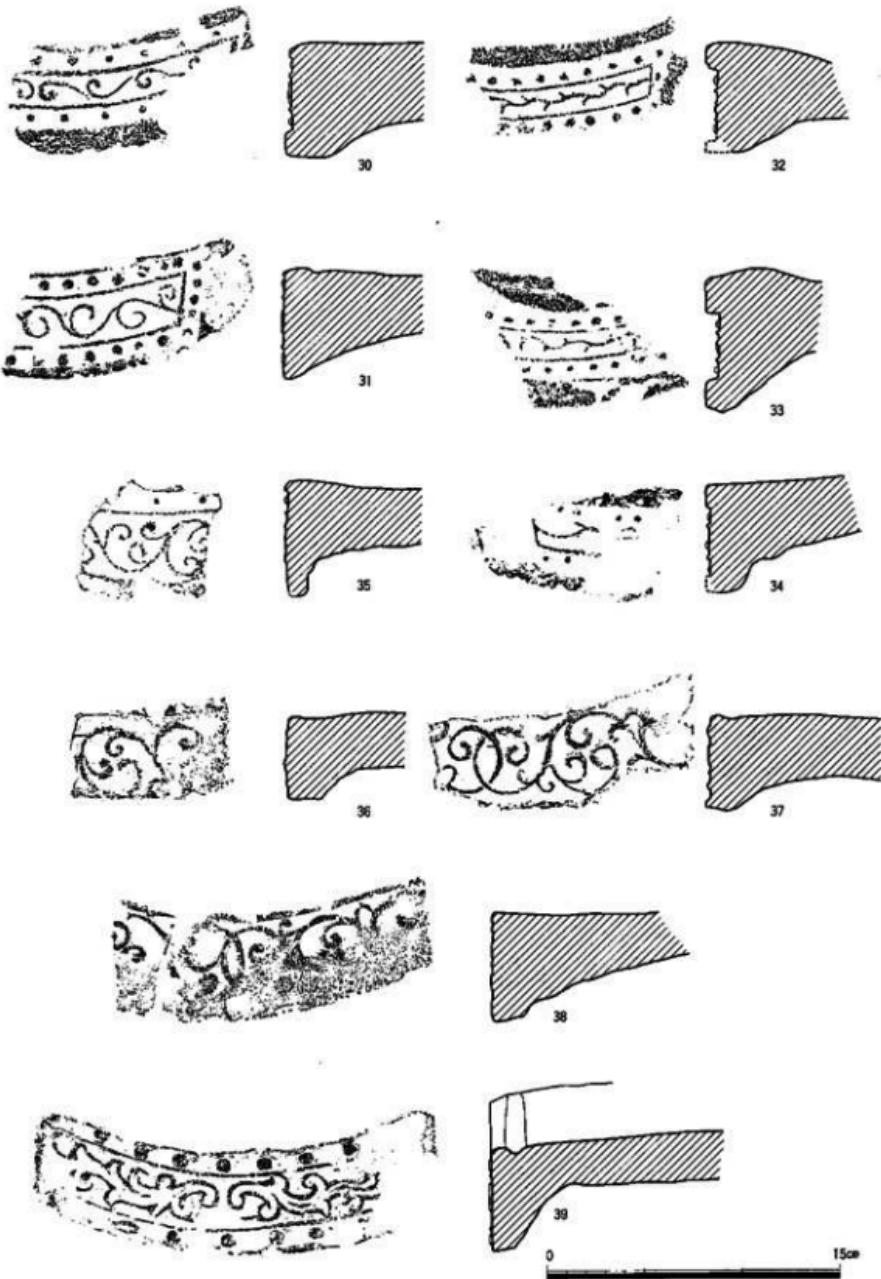
25



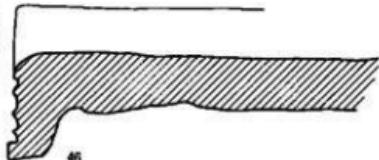
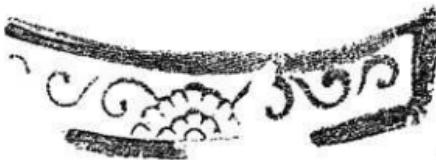
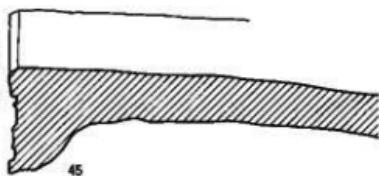
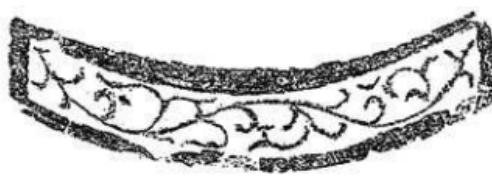
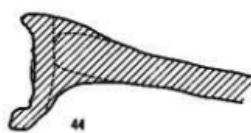
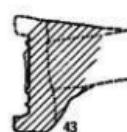
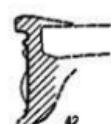
29

0 15cm

出土軒丸瓦拓影・実測図

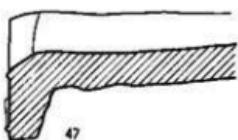


出土軒平瓦拓影・実測図

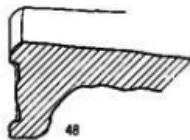


0 15cm

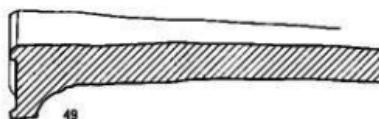
出土軒平瓦拓影・実測図



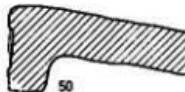
47



48



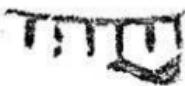
49



50



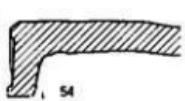
52



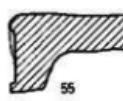
51



53



54



15cm

0

出土軒平瓦拓影・実測図

## 法勝寺跡発掘調査概報

昭和61年度

発行日 昭和62年3月31日

発 行 京都市文化観光局

住 所 京都市左京区岡崎最勝寺町13京都会館内

編 集 財團法人 京都市埋蔵文化財研究所

住 所 京都市上京区今出川大宮東入ル元伊佐町

TEL (075) 415-0521

印 刷 真 陽 社